

日本文化宣教協力会 ニュース

発行：日本文化宣教協力会事務局
2013年6月16日発行 第2号

Vol.2

巻頭言



主幹伝道者 高橋敏夫
(春日部福音自由教会名誉牧師)

NHKのラジオ深夜便「明日への言葉」に、高橋敏夫師が出演。『出会いと別れ、高山右近に学ぶこと』の要約です。（放送は3月27日午前4時台）

司会：なぜ、高山右近を研究されたのですか？

高橋：僕自身、高山右近という武士に対して最初は関心が薄い人間でした。きっかけは、僕が神学校を出て最初に訪問したのがドイツで、そこにはドイツのキリスト教があったことです。つまり、ドイツという国の歴史と文化に基づいたドイツ人のキリスト教があったのです。それはイギリスにも、アメリカにもいえることでした。また、ドイツの人から日本の特長は何ですかと問われても、僕自身、日本人の心を語る事ができませんでした。その時に、日本の歴史、文化や特長、日本人の心などをしっかりと語る事の大切さということを感じました。

日本では1%の日本人しかキリスト者はいないのです。何で日本人はキリスト教が嫌いなのだろうと思ったのです。それは、日本の教会がどこかの国のコピーでしかなく、日本人の心に寄り添った教えをしていなかったからではないかと気付きました。

そこで、キリスト教を日本の歴史や文化に寄り添った日本人の心と言葉で語った人はいなかったのだろうか調べてみたのですが、内村鑑三ではありませんでした。さらに、誰だろうかと突き詰めていったところに高山右近がいたのです。

司会：どうして神学の道を志したのですか？

高橋：高校時代に聖書研究会というのがありまして、16歳の夏休みに、仲間達と学校の便所掃除をしていた時に、同級生の一人が臭いぼつとん便所の掃除なのに、ハミングをしながら楽しそうに掃除をしている姿を見たのです。彼の姿に感動するとともに、信仰を深めなければと感じて進学しました。

司会：日本人キリスト者のモデルが高山右近だったのですね。そして、高橋先生は生誕地から終焉の場所マニラまで

行かれたのですか。

高橋：高山右近を調べれば調べるほど分からないことばかりなのです。秀吉の「キリシタン追放令」が出され、金沢の前田家の客将となり、南坊（なんぼう）と名乗った右近。この南坊とは、南蛮の僧侶、つまりキリスト教宣教師という意味なのです。

そんな右近から利休に送った手紙に「羽箒が良く出来たので一服差し上げます」というものがありました。羽箒というのは清めの道具なのですが、それがうまく出来たから、4時間にわたる茶会を催すというのです。茶の湯というのが分からないと、こんな右近の境地は理解できない、そこで、僕は表千家の門をたたいて茶の湯の勉強を始めました。

司会：右近と茶の湯とのつながりは強いのですね。

高橋：右近が武将であり、千利休の一番弟子であり、キリシタン大名ということは分かるのですが、21歳で高槻城主として大名になったにもかかわらず、大友宗麟の嘆願による島津征伐で九州に布陣していた秀吉から「バテレン禁止令」が出ると、大名を捨ててしまう潔さがありました。

同じキリシタン大名であった小西行長が、秀吉から厳しい追及を受けなかったのにも関わらず、右近が3回も使者を送られて改宗を迫られたのは、行長が秀吉子飼いの大名であったのに対して、右近が信長からの家臣であったという違いもあります。2回目の使者であった利休の説得にもかかわらず「武士は二君に仕えない。私は神に仕える」と言うのです。僕が茶の湯を学び始めた頃は、江戸時代に書かれた『南方録』が基本と考えられていました。これは仏教で語られた茶の湯なのです。しかし、右近を調べていくと不思議なことに、そうではないのです。利休も、道具、茶室、作法が年をとるに従ってシンプルになり、削り取っていくのです。最後は一畳半の茶室で、心からのもてなしをしようとなるのです。

戦国という殺伐とした時代、国をとり富をとろうという欲望が渦巻く時代の中で、出会いを大切に命を寿ぐことができ、ありがとうという気持ち茶の湯にあったのではないのでしょうか。人々の乾いた心を潤し癒すものが茶の湯であったと考えます。

司会：現代に通じるものは？

高橋：自分の欲望をかなぐり捨てて生きること。喜び、悲しみ、苦しみも共に家族や近い人たちと分かち合うということが大切ではないでしょうか。みんなの乾ききった心を哀れむ（共に苦しむ）ことが大切ではないでしょうか。別れと出会いをしっかりと受け止めて、好きな人と一緒に生きて、一緒にいられることが幸せではないでしょうか。

2013年の高橋敏夫師に関わる奉仕

6月29日～7月1日 気仙沼聖書バプテスト教会
10月18日～20日 高松シオン教会
11月2日～4日 京都セミナーハウス
11月29日～12月1日 鳥取県琴浦町
12月8日 大津福音自由教会

その他

春日部市民文化講座（ボーイスカウト春日部10団主催）
第16回丘の上チャリティー茶会（丘の上チャリティー主催）

活動報告

1月1日～3日 丘の上新年茶会
1月30日 市民文化講座第4回
ゲスト 島田利雄（桐箒筥）
3月27日 市民文化講座第5回
ゲスト 着物ひしや

日本文化宣教協力会 会計報告

自 2012年11月18日～至 2013年4月30日

収入の部		支出の部	
繰越金	492,881 円	事務費	15,167 円
献金	364,600 円	通信費	7,938 円
受取利息	59 円	研修費	120,000 円
		支払献金	20,000 円
		奉仕活動費	45,130 円
		宿泊費	37,000 円
		繰越金	612,305 円
合計	857,540 円	合計	857,540 円

備考：
①研修費： @20,000円/月 11月～4月（7ヶ月分）
②福岡奉仕：2012年11月24日～27日

日本文化宣教協力会ニュースを、今後はEメールにてお届けしたいと考えています。メールでの配信を希望される方は、協力会事務局までお知らせください。

サポートのお願い

当協力は、本会の趣旨に賛同する方々の祈りと献金によって支えられ、運営されております。ご支援いただけます方は、同封の振込用紙、または専用の封筒をご利用くださり、お献げいただきたいと存じます。

日本文化宣教協力会事務局
〒344-0067

埼玉県春日部市中央1-5-1-7

春日部福音自由教会内

Tel 048-735-4765

Fax 048-735-4726

Eメール y-gospel@tcat.ne.jp

郵便振替

ゆうちょ銀行春日部店

口座番号 00140-9-394018

加入者名 日本文化宣教協力会

編集後記

主の御名を賛美いたします。

日本文化宣教協力会と、主幹伝道者である高橋敏夫先生のために、お祈りとご支援をいただき、ありがとうございます。

本号の巻頭言は、NHKラジオ深夜便にて放送された高橋師のお話しを、市内のKさんが的確にまとめてくださいましたので、そのまま掲載させていただきました。放送を聞かれた方からいろいろな声が寄せられており、あらためて全国放送の力を感じます。

復活の信仰をこの日本の中でどう表現していくのか、復活の証人としてその証しをどの様に伝えていくのか、その課題に取り組んでいる春日部福音自由教会の復活祭の様子を、小野牧師に紹介していただきました。また、創刊号で福岡伝道のとりまとめをしてくださった宮内先生からは、あらためて原稿を寄せていただきました。感謝をいたします。

教派や地域を越えて、主イエスの福音がこの地に根ざすために、これからも務めて参りたいと願っております。愛兄弟の皆様の祝福を、お祈りしております。

2013年6月23日

日本文化宣教協力会 会長 山田 豊